

第1章

引越し小説としての『百年の孤独』

初出：note 2014年8月10日

ホセ・アルカディオ・ブエンディアの一族が海から遠く離れた内陸の土地にマコンドという村を開拓し、繁栄させ、百年の後に村も一族も滅んでしまう。大雑把に言えば『百年の孤独』はその一族と村の年代記である。しかし、それを知ったところで『百年の孤独』を体験したことにはならない。この文章では、大雑把なあらすじとは対極のこと、細かいところに拘りながら読み進めたいのだ。なにしろ、可笑しいことは細部に宿るのだ。町を繁栄させるのも、滅ぼすのも、国家を転覆しうるものもやはり最初は細部に宿ったはずだからだ。そうやって冒頭から読みはじめてまず引つ掛かるのは、

マコンドを開拓した若き族長ホセ・アルカディオ・ブエンディアの腰が据わっていないという事実だ。開拓者らしからぬその姿に驚かされる。彼はマコンドが本来あるべき場所を求めていまだに彷徨っており、心は引越しの最中なのだ。

せっかく開拓したにもかかわらず、たちまち引越そうと試みる。それはいったいどうしてなのか。まるではじめて出勤する日から、別の仕事を探しているひとのようではないか。

なぜか、このふらついている男のことが気になった。そんなホセ・アルカディオ・ブエンディアについて考察を深めなければと思いつつ、私もまた雑念を払いきれずに、たまたま見つけたテレビドラマを観てしまったのだ。それは『それで



社宅にやってくる山村夫妻 [3]

も家を買いました」(91)というドラマだった。バブル絶頂期の地価が高騰しつづける時代に、夢のマイホームを求めて東奔西走するサラリーマン夫婦を描いた名作だ。主人公は化学専攻を卒業してプラスチック加工機械を手がける企業に勤める山村雄介と、その妻・山村浩子。それらを演じるのが若き三上博史と田中美佐子だ。神戸支社で出会った二人は神奈川県への転勤を機に結婚し、ハネムーンから南武線沿いの社宅に引っ越してくる。そんな場面からドラマははじまる。

社宅にはさまざまな人たちが住んでおり、浩子は引越し早々息苦しさを感じる。たまたま知り合った社宅の近所に住



リビングで集う社宅の同志たち [3]

む夫婦から、

「今後ますます土地は高騰し、今マイホームを探しをしておかなければ、サラリーマンには手が届かなくなる。後になつて後悔してしまってもいいんですか」

と半ば脅されて、少しずつマイホーム探しをはじめた。

そして、当時中学生だった私の記憶に鮮明に残っているシーンが、夫の雄介が「海老名のマンションにしとこうぜ」と言ったときの妻浩子のセリフだ。

「海老名は、ゼッターにいやー!!」

テレビのスピーカーがうるほどの大絶叫だった。私は当時、海老名はとても酷い場所なのだ記憶し、会社に入つて出張で海老名を通るたびに、

「海老名はゼッターにいやー!!」

といったときのあの田中美佐子の悶絶した表情を思い出したのだ。そうだ、彼らもまた入ったばかりの社宅から一刻も早くマイホームに引越しようとしているのだった。

『百年の孤独』のブエンディア夫妻、『それでも家を買いました』の山村夫妻。時代や場所は異なれど、これらをいっしょに考えることは、なにかこれまで気付かなかつたところへと私たちを連れて行ってくれるのではないか。私はその分の悪い賭けに懸けてみたいと思った。そう思った途端に、もし山

村浩子たちが『百年の孤独』の舞台マコンドに引越しすることになったら、どうなっただろうかという割とどうでもいい考えが頭をよぎったのだ。

『それでも家を買いました（マコンドに）』

それは大変だ。なにしろ「マコンドも当時は、先史時代のけものの卵のようにすべすべした、白くて大きな石がごろごろしている」ような「川のほとりに葦と泥づくりの家が二十軒ほど建っているだけの小さな村」だったし「ようやく開けそめた新天地なので名前のないものが山ほどあった」(p.10)からだ。

「なによお、ここお。話をするたびに、いちいち指ささなきやいけないじゃない。私こんなところには住みたくないわ。オーブンキッチンじゃなきやいやなの、こんな漆喰の家では暮らせないわよ」

「そんなこと言ったって仕方がないだろ。俺の給料じゃ、ここが精一杯なんだよ」

浩子がかめつ面をして雄介に噛み付く姿が容易に想像できる。ホセ・アルカディオ・ブエンディアとその妻ウルスラたちはその住むのに骨の折れる土地に入植して暮らしていたのだ。どんな土地であれ人を導き村を開拓するという仕事は簡単に成し遂げられるものではない。ホセ・アルカディオ・ブエンディアにも「若き族長として振る舞い……村の発展の

ために協力を惜しまなかった」(p.20)時代があったのだ。しかし、その注力ぶりを読み進むにつけ、やはりこの人は大丈夫なのだろうかと不安になったのだ。「どの家からも同じ労力で川まで行って水汲みができるように家々の配置を決め」(p.21)たり「ほかの家よりよけいに日があたる家が出ないよう」に考えて通りの方向をさだめた」(p.22)りする族長は、頼りになるといっても、生真面目で、若干神経質な融通の効かぬ男なのではないかというふうによく考えざるをえないのだ。

そして、その熱意や真面目さが、ちよつとしたきつかけでまったく違うものに湯水のごとく注ぎ込まれることになったと知り、私はなにか既視感を覚えた。これはなんだろうか。きつかけはジブシーたちが持ち込んだ発明品だった。「毎年三月になると、村のはずれにテントを張り、笛や太鼓をにぎやかに鳴らして新しい品物の到来を触れて歩」(p.15)くジブシーの一家がやってくるようになった。ジブシーのひとりメルキアデスが持ち込んだ磁石や巨大なレンズ、錬金術やらに魅せられて、ホセ・アルカディオ・ブエンディアは献身ぶりを示して実験や研究に没頭し、部屋に籠りきりになってしまふ。「率先して社会に奉仕するというこの心がまえも……世界の不思議を見たいという願望によって……あつさり消えた」(p.21)。

万一の時のためを思っていた山羊や、妻ウルスラの父がく

れた植民地時代の金貨やらを、ジプシーの発明品と交換してみたり、錬金術を試すために、金貨をどろどろに溶かして、わけのわからないものと混ぜ合わせて、結局鍋の底に焦げ付かせて使い物にならなくしてしまったりする。まったく動かない夫で、言い出したら聞かないことも知っているため、ウルスラの悩みは深い。レンズを兵器として利用しようとして、「焦点を結んだ太陽光線にわざわざ体をさらし、崩れて容易になおらぬほどのやけどを負った」り、「火事を出しかけた」(P14)。また、「天体の運行を観測するために中庭で徹夜をし、正午をはかる精密な方法をきわめようとして日射病で倒れかけた」(P15)りする。ひとによってはこんな男許せないと思うかもしれない。けれど私はこういう人たちに既視感を覚えるのだ。そうだ、彼はまさに真理の追究に命を懸ける研究者なのだ。

彼は熱に浮かされたようにぶつぶつと独りごとを言い、そしてある日ある結論を得て家族の前で突然こう叫ぶのだ。

「地球はな、いいかみんな、オレンジのように丸いんだぞ！」(P16)

それが正しいかどうかなど関係がない。むしろ、村での生活ではそんなことはどちらだつて構わないのだ。そしてどちらでも構わないことを突然叫びだした夫に妻のウルスラは叫び返す。

「変人は、あんただけでたくさんよ！」(P16)

そう言つて、彼が研究に使つていた「天体観測儀を……腹立ちまぎれに床に投げて……壊した」(P16)。悪夢だ。私なら泣いてしまうかもしれない。ところが、それでも彼はあきらめない。これまでに触れた遠方からやつてくる発明品だけでは飽き足らず、文明世界との接触を目指して、村の男たちを連れて村を出る。そして、求めてもいない海に遭遇すると、彼はこう言い放つた。

「なんだ！ マコンドは、海に囲まれているのか！」(P20)

ついで行つた男衆には言いたいこともあつたと思うのだ。「なんだじゃないよ、ブエンディアさん。あんたがうまくいかつて言うから付いてきたんだよ。これどうするんですか」でもそんなことを周囲には言わせない。いや、言つても無駄だと思わせる。正直で真面目な性格だからこそ成せる技だ。リーダーならこういう落胆の時にも、その落胆を表に出さずに、気の利いたことのひとつも言うに違いない。

「ええ、結果として今回は海にたどり着いたわけですから、これも、これは我々の村・マコンドの発展に今後必ずや助けとなることでしょう」

とかなんとか、当たり障りのないことを言い、尽力した人たちの努力を誇るものではないか。しかし、そんなことはしないのだ。諦めず、村の周辺に「地図を書きあげると、マコ

ンドを適当な土地に移すことを思いつ」(P.25)く。ウルストラがその計画の先回りをして邪魔をする。なぜいつも企てが頓挫するのか、身内を疑うことのない純粋な彼はひとり準備をし、妻にこう言う。

「誰にも行く気はないらしい。わしらだけで出かけるか」

するとウルストラは

「出かけませんよ。この土地に残ります。」

とおだやかだが固い決意で言い、

「ここに残りたけりや死ぬというのなら、ほんとに死ぬわ

よー」(P.26)

と叫ぶのだ。

私はここで再び『それでも家を買いました』のあのシーンを思い出さずにはいられなかった。

「海老名はゼツタイにいやー」

田中美佐子は絶叫していた。自宅の食器棚がガタガタと揺れ、カーベットはジジジッと地響きを立てた。海老名は嫌なのだ。そんなところには引越したくない。昨今のドラマではNGになりそうなセリフだが、その時、ウルストラと田中美佐子演ずる山村浩子は通じ合うのだった。

三上博史演ずる山村雄介は妻浩子に顔を寄せ、やさしい声でなだめるようにその海老名の家のよいところを説明する。

「横浜までの電車はちよつと時間が長くなるけどさ、駅から

は近いわけだしさ。こんないい条件の物件、なかなかいい不動産屋も言ってただろ？」

それはまたホセ・アルカディオ・ブエンディアと重なるのだ。ホセ・アルカディオ・ブエンディアも妻の意志の強さに驚きながら、「地面に魔法の液をまくだけで思いどおりに物がみのもり、苦痛を消すためのあらゆる器具がただ同然の値段で手にはいる不思議な土地」(P.26)があるのだと言って気を引こうとした。

しかし当然のことながら、彼女はそんなことは信じずに、こう言い放った。

「おかしなことはかり考えるのはやめて、少しは子供たちの面倒をみたらどうなの」(P.26)

何もかもがその時に起こった。マコンドを移すことを諦めきれなかった彼が、「妻の言葉をまともに受けとめた。」(P.26)「これから先も離れることがないとわかった家のなかからはんやりと子供たちをながめ」(P.27)るうち、臉が濡れていき、それを拭いながら、地に足のついた暮らしをしていく決心を固めた。

素晴らしいですよ、ブエンディアさん。やれば出来るんです。私は感動した。でも、「その瞬間から地上に存在しはじめたという印象を与え」(P.27)た駆けまわっているふたりの子供たち、兄ホセ・アルカディオは十四歳、弟アウレリヤノ

は六歳。いや、いくらなんでもそれはちよつと遅すぎるのではないだろうか。

でもこの救いようがないダメなところもそうなら、救いもやはりこの人には常に生真面目さにある。やはり憎みきれない。一度、決心するとさすがは熱心で、真面目な族長である。彼はその貴重な時間を子供たちのために割くようになる。いか悪いかは別にして、「さまざまな世界の不思議について話してきかせた」(p.28)りする。

そのころ、毎年マコンドを訪ねてきていたジプシーにも時代の転機が訪れていた。メルキアアスは死んだよとジプシーたちが言う。そして、もってくる発明品もこれまでとは随分違っている。「タンパリンの音につられて金の卵を百個も産みおとす雌鶏」にはじまり「ボタン付けにも熱まじにも役立つという万能の器械」「暇つぶしにもつっこいの膏薬」(p.28)。いったいこれはなんなのか。なにものかはわからないが、明らかに時代の転機が訪れていることだけはわかるのだ。そして、小説の冒頭で述べられている氷との出会いが訪れる。ホセ・アルカディオ・ブエンディアはアウレリヤノを連れていった市場ではじめて氷に触れるのだ。アウレリヤノは

「これ、煮えくり返ってるよー」(p.30)と言ひ、父は「これは、近來にない大発明だ！」(p.31)と叫ぶ。

こうして、ホセ・アルカディオ・ブエンディアはマコンドという土地に落ち着く決心をし、地に足をつけた生活をはじめることになる。そもそも、どうして彼は故郷を離れ、マコンドを開拓しなくてはならなかったのか。一方、夢のマイホームを求める山村夫妻にどのような試練がつづくのだろうか。ぜひとも『百年の孤独』を求めて本屋さんへと走ってくださ。私はまた日がな一日、代わりに読みつづけます。

参考文献

- 1 ガブリエル・ガルシア・マルケス『百年の孤独』（鼓直訳）、新潮社、二〇〇六年。
- 2 Gabriel Garcia Marquez, "Cien años de soledad". 1967.
- 3 TBSドラマ「それでも家を買いました」一九九二年。本文中、ページ数のみを示している場合は、文献[3]からの引用です。

『百年の孤独』を代わりに読む

目次

- 第0章 明日から「『百年の孤独』を代わりに読む」をはじめます
- 第1章 引越し小説としての『百年の孤独』
- 第2章 彼らが村を出る理由
- 第3章 来る者拒まず、去る者ちよつと追う『百年の孤独』のひとびと
- 第4章 リズムに乗れるか、代わりにならないか
- 第5章 空中浮遊に気をつけろ
- 第6章 乱暴者、粗忽者ども、偏愛せよ
- 第7章 いつもリンパ腺は腫れている——大人のための童話
- 第8章 パパはアウレリヤノ・ブエンディア大佐
- 第9章 マコンドいちの無責任男
- 第10章 N.Y.のガイドブックで京都を旅したことがあるか？
- 第11章 ふりだし
- 第12章 レメディオスの昇天で使ったシートは返してください
- 第13章 物語を変えることはできない
- 第14章 メメに何が起ったか
- 第15章 ビンゴ
- 第16章 どうして僕らはコピーしたいのか？
- 第17章 如何にして岡八郎は空手を通信教育で学んだのか？
- 第18章 スーパー記憶術
- 第19章 思い出すことでしか成し得ないものごとについて
- 第20章 代わりに読む人
- あとがき

試し読み用見本誌

ご自由にお持ちください

『百年の孤独』

を代わりに読む



友田とん

脱線する話を読んで
いるうちに、『百年の孤独』
が読めてしまう。

『百年の孤独』を代わりに読む／友田とん

(第26回文学フリマ東京出店作品)

A4版 本文204ページ(一部カラー)、定価1,200円

一部書店やBOOTH (<https://kawariniyomu.booth.pm/>)で販売中